経 済 研 究

第13巻 第3号

July 1962 *Vol. 13 No. 3*

「土台・上部構造」の理論について

宇佐美 誠次郎

近年多くの国で国家独占資本主義や財政問題の研究が進むにつれて，「土台・上部構造」論の正しい理解とその深化があらためて望まれているようにみえる。ここではその問題のいわば基礎的な反省の1つ，社会的諸関係における「土台・上部構造」論の基本的意義について述べたいと思う。

1

スターリンは，「言語が土台の上にたつ上部構造であるというのは正しいか？」という問にたいし，「いや，正しくない。」と答え，つづけていう。「土台(Базис)とは，その発展の一定の段階における，社会の経済構造である。上部構造(Надстройка)——それは，政治的，法律的，宗教的，芸術的，哲学的な社会の諸見解と，それらに照応する政治的，法律的その他の諸機関とである。」[1)]

レーニンは，たとえばつぎのようにいう。「マルクスは，マニュファクチュアのことを，それは大量な小規模生産の上にたつ上部構造であるといったが，帝国主義と金融資本主義は，古い資本主義の上にたつ上部構造である。」[2)]

以上2つの引用から，ある人が，「上部構造」とは，「政治的，法律的……な社会の諸見解とそれらに照応する政治的，法律的その他の諸機関」であるのか，「帝国主義と金融資本主義」であるのかなどと問うとしたらどうだろう。あるいはまた，「上部構造」とか「上部構造の部類」(スターリン)とかに「なにを数えいれるべきであるか？」などと苦慮するとしたらどうだろう。

いわゆる「土台・上部構造」論は，周知のごとく，Marx による「史的唯物論の一般的定式」として「経済学批判・序言」の中で古典的にのべられている。「人々は，彼等の生活の社会的生産において，一定の，必然的な，彼等の意志から独立した諸関係，すなわち，彼等の物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係にはいりこむ。これら生産諸関係の総体は，その社会の経済構造[3)] (Die ökonomische Struktur) を，すなわち，法律的，政治的な上部構造[4)] (Ein Überbau) がその上にたち，一定の社会的意識諸形態がそれに照応する，現実の土台[5)] (Die reale Basis) を形づくる。

1) И. Сталин, Марксизм и вопросы языкознания. 1950. стр. 3. 以下スターリンの著作からの引用はすべて同書からのもの。

2) В. И. Ленин, Сочинеиия, Издание четвертое, том 29, стр. 147.

3, 4) Struktur, Структура も Bau, Стройка も「構造」と訳してある。Überbau, Надстройка を，河上・宮川訳では「上層建築」としている。毛沢東も「上層建築」(『矛盾論』) と書いている。

物質的生活の生産様式が，社会的，政治的，精神的生活過程一般を条件づける[6]。……経済的基礎[7] (Die ökonomische Grundlage)の変化とともに，巨大な全上部構造が，おそかれ早かれくつがえされる。これらの諸変革を考察するさいには，自然科学的正確さによって確認できる経済的生産諸条件の物質的変革と，そこにおいて人々がこの衝突を意識し，たたかいぬく法律的，政治的，宗教的，芸術的，あるいは哲学的，要するにイデオロギー的諸形態とをつねに区別しなければならぬ。」

Marx の「定式」について，レーニンは次のようにいう。「経済的社会構成体の発展を自然史的過程と解する」Marxの基本思想は，「社会生活の種々なる分野の中から経済の分野をとりだすことによって，またすべての社会関係の中から生産諸関係を，それ以外のすべての諸関係を規定する基本的な，第1次的なものとしてとりだすことによって」つくりあげられたのである。「彼等の基本思想は，社会的諸関係は物質的社会諸関係とイデオロギー的社会諸関係とに分けられる，ということにあった。後者は前者にたいして上部構造であるにすぎず，前者は，その生存を維持するための人間の活動の形態(結果)として，人間の意志や意識とは別個に形成される。」[8]

2

いうまでもなく，土台と上部構造とは，相対的関係にある一対の概念であり，本源的な規定・被規定の相互関係を示している。このばあいつねに，ある限定された意味と範囲での相互関係が問題とされている。何に対して何が土台をなすのか，あるいは，何に対して何が上部構造をなすのか，というように。土台をなすものは，それの上部構造をなすものに対して，その関係において土台である。上部構造をなすものは，それの土台をなすものに対して，その関係の内部で上部構造である。

Marx, Engels やレーニンは，「土台・上部構造」という概念を，いろいろなばあいに使用している。「土台という術語を，Marxは，社会的上部構造の現実的土台を示すためだけでなく，その他の多くのばあいにも使っている。たとえば彼は，古代農業の土台についても，技術の土台についても，貨幣流通の土台等々についても語っている。」[9]

土台といえばつねに生産諸関係の総体をさし，上部構造といえばつねにイデオロギー的社会諸関係をさすとはかぎらない。レーニンが上部構造という術語を使うばあい，しばしば〝〟等をつけている。彼はそうすることによって，「上部構造」が物質的社会諸関係にたいするイデオロギー的社会諸関係をさしているということを，とくに示唆している。建築業者が哲学者から「土台とはなにか？」とたずねられてふき出したとしても罪はその建築業者にはないだろう。言語や芸術が，上部構造であるかないか，土台や上部構造にどんなものを数えいれるべきかなどと苦労するまえに，いわゆる「土台・上部構造」論の意味を正しく把握する必要があるように思われる。

「経済学批判・序言」の中で，Marx は一定の社会における社会的諸関係内部の基本的な仕組みを示すために，土台と上部構造という一対の概念をもちいている。社会的諸関係についての「土台・上部構造」の理論は，一定の社会における物質的社会諸関係が，それ以外の社会的諸関係(＝イデオロギー的社会諸関係)にたいして，いわば現実的な土台であり，後者は前者にたいして，いわば上部構造であることを示している。つまり，一定の社会の社会的諸関係全体の中で，物質的社会諸関係が基本的な関係であり，物質的生産様式が，その社会における他の社会的生活諸過程を，一般的に，窮極的に条件づけるものであることを示し

5, 7)　レーニンは，Basis にも Grundlage にも同じ語 Основание をあてている。(Соч. т. 1, стр. 120～121.)

6)　この文章の冒頭にレーニンは「かくして Таким образом と補って Marx を引用する。これはレーニンの理解を知る上で意味がある。レーニンが Marx の「定式」を自ら訳して引用した個所(Соч. т. 1, стр. 120～121)をみると叙述の仕方が少し変っている部分がある。そうしたさいに，たとえば邦訳『レーニン全集』などが，直接 Marx の原典からの訳文でとりかえてしまっているのは残念なことであると思う。

8)　Соч. т. 1, стр. 118～134.

9)　Б. И. Бродский, Взаимодействие базиса и надстройки,《Вопросы Философии》, No. 3 за 1957 год.

ている。それは，精神にたいする物質の第1次性・本源性を主張する唯物論の基本命題を，社会的諸現象の社会科学的分析に適用したものである。それは，イデオロギー的社会諸関係の発展過程を，したがってまた「社会的，政治的，精神的生活過程」を，その物質的根拠から科学的に解明する可能性をきりひらく。

社会生活の物質的基礎は，人々の物質的生活の社会的生産である。社会的生産という言葉自体，その過程が2面的であることを示している。すなわち，人々は自然に関係するとともに，相互に関係する。そのさい，自然にたいする人々の関係をあらわすものは生産力であり，人々の相互の関係をあらわすものが生産関係である。したがって，生産諸関係は社会生活の物質的基礎すなわち人々の物質的生活の社会的生産諸過程における社会的側面をなしている。レーニンの言葉をかりれば，生産諸関係は「その生存を維持するための，人間の活動の形態」であるといえよう。

生産諸関係は，人々が生活を社会的に生産する過程で，人々の意識から独立して形成され，発展してゆく。生産諸関係が物質的なものであるということは，それらが，人間の意識を通過しないで，それとは独立に形成されているところにある[10]。これにたいして，イデオロギー的社会諸関係は，人間の意識(社会的諸関係の意識)を通過してから形成される[11]。

3

カムマリはつぎのようにのべている。「われわれのうちでは，しばしばイデオロギーとイデオロギー的諸関係を同一視している。これには同意できない。」[12]いわゆる「土台・上部構造」の理論にかんし，イデオロギーとイデオロギー的関係とを区別することは，カムマリの主張する通り必要なことである。というのは，社会的諸関係のうちで，物質的社会諸関係にたいして上部構造をなすものは，イデオロギー的社会諸関係であって，イデオロギーではないからである。しかしカムマリ自身，その区別を充分におこなっているだろうか？「なにが上部構造にはいるだろうか？　上部構造には，経済構造から派生した政治的，法律的，宗教的，道徳的な諸関係がはいる。それらは，発生する前に人々の意識を通過する。だからレーニンは，これらの諸関係を経済的，物質的なものから区別して，イデオロギー的なものと名づけたのである。社会の上部構造には，したがって，あらゆる社会思想，哲学，政治的・法律的イデオロギー，道徳，芸術，宗教，および照応する諸機関，国家，法律，政治的諸組織，文化的・教育的その他の諸機関がはいる。」みられるように，この文章の中でも，「上部構造」として，時にはイデオロギー的社会諸関係をあげ，時には芸術その他のものとともにイデオロギーを数えいれている。

イデオロギーは人間の意識が生みだすものであり，意識の内容をなすともいえよう。イデオロギー的社会諸関係は，かならず人間の意識を通過してから，人々の相互の間に形成される。だから，両者はかたくむすびついているとはいえ，すっかり同一のものではない。「上部構造」が，物質的社会諸関係にたいするイデオロギー的社会諸関係をさすものとすれば，当然のことながら，イデオロギーは「上部構造」ではありえない。

かって，文学，総じて芸術は上部構造であるか否かの問題をめぐり，さかんな研究討論がおこなわれた。そこでは，芸術とはいかなるものか，つまり，芸術の特性についても，論議されたことはたしかである。すなわち，一定の時代に創作された芸術作品が，その時代を生きぬくだけでなく，さらにながい時代にわたって芸術的生命を輝かし

---

10) Ленин, Соч. т. 14, стр. 117, 247 ; т. 1, стр 123. 「意識を通過しないで」とか「意識から独立して」とかいうことは，認識するとかしないとか，あるいは，気づくとか気づかないとかいうことにはかかわりない。気づこうが気づくまいが，いずれにせよ人間の意識には依存せずに，ということである。

11) 「イデオロギー的社会諸関係(すなわち，それらが形成されるまえに，人々の意識を通過するような諸関係)……」「いうまでもなく，つねに社会的諸関係の意識についてのべているのであって，他のいかなるものの意識についてのべているのでもない。」(там же, стр. 122.)

12) М. Каммари, Некоторые вопросы теории базиса и надстройки, 《Коммунист》, No. 10 за 1956 год. 以下カムマリからの引用はこの論文による。

つづけるのはなぜか，という問題などをめぐって。だかしかし，それも結局，芸術は上部構造であるか否かに，かならず関連させられていた。いわゆる「芸術上部構造論争」では，その呼称も示すように，芸術は上部構造であるか否かが中心問題であった。「討論は，芸術の特性の諸問題によってではなく，土台と上部構造の本性にたいする見解の相違によってひきおこされた……」[13] ともいわれているとおりである。したがって，「芸術の特殊性が具体的に解明されなければ，芸術の上部構造的および非上部構造的性格についてのあらゆる議論は，不可避的にスコラ的な様相をおびてくるのである。」[14] が，それとともに，他方，いわゆる「土台・上部構造」の概念は，いかなる意味のものかがただされねばならなかったのであろう。

芸術作品は，イデオロギー的社会関係と同じものであるとはいえない。イデオロギー的社会諸関係は，芸術作品の創作を条件づけ，またその芸術作品を介してイデオロギー的社会諸関係が形成されてゆく。だからたとえば，芸術作品とイデオロギー的社会諸関係との相互関係を研究することなどは，非常に有意義であるとさえいえよう。しかし，いわゆる「上部構造」が，このばあいも，物質的社会諸関係にたいするイデオロギー的社会諸関係をさすものとすれば，当然のことながら，芸術は「上部構造」ではありえないだろう。芸術は，イデオロギー的社会関係ではないのであるから。すでにのべたように，「土台・上部構造」の理論は，直接には，社会的諸関係内部の基本的仕組みを示したものである。

4

スターリンはのべている。「上部構造は土台によって生みだされるが，しかしこのことは，けっして，上部構造がただ土台を反映するにすぎないとか，上部構造が受動的であり，中立的であり自分の土台の運命や，諸階級の運命や，社会構造の性格やにたいして，どうでもよい態度をとるとかは意味しない。反対に，生れでると，上部構造は，きわめて大きな，能動的な力となり，自分の土台が完成し強化するよう能動的に協力し，新しい社会構造が，古い土台と古い諸階級の息の根をとめ，根絶するのを助けようとしてあらゆる手段をとる。それ以外にはありえない。」上部構造は，そのためにこそ，「土台によってつくりだされる。」

これにたいし，カムマリはつぎのような批判と提言をのべている。「敵対的な構成体における上部構造の敵対的性質を承認することに関連して，上部構造は自分の土台を能動的に守るということについてのスターリンの定式をより精確にすることが，ぜひ必要である。この命題は，敵対的な構成体の上部構造の概念を，ただ支配階級の諸思想と諸機関の体系までつづめるものである。なぜなら，被抑圧諸階級の諸思想や諸組織は，これら諸階級を，抑圧，搾取，貧困と零落の運命におとしいれている土台を，けっして守ったり強化したりしない，ということはまったく明らかなことだからである。」したがって，「われわれの見解によれば，史的唯物論の術語を整理するために，敵対的な社会の上部構造全体と，支配階級の利益をあらわし守っている上部構造の主な部分とを区別しなければならない。そして，それらに応じ，たとえば，ブルジョア的上部構造と，ブルジョア社会の上部構造（後者が含むのは，支配階級の諸思想や諸機関だけでもブルジョア的上部構造だけでもない）とについて語らねばならない。」

物質的社会諸関係もイデオロギー的社会諸関係も，ともに，人々の社会的実践によって，人々が相互にとりむすぶものである。両者は相互に対立すると同時に依存しあっている。それらの基礎には，感性的・人間的活動，すなわち，人間の実践がある。だからこそ，人間の社会的実践活動により，一定の条件にしたがって，イデオロギー的社会諸関係から，その「土台」である物質的社会諸関係への能動的な反作用もおこなわれうるのである。

物質的社会諸関係の発展過程は，人間の意識からは独立している。したがって，それ自身が「意識的に」発展するということはありえない。たと

---

13) И. А. Светличный, О отношение искусства к надстройке антагонистического общества, 《Вопросы Философии》, No. 3 за 1957 год.

14) 山村房次「ソヴェトにおける“文学上部構造”論争」『思想』1956 年 2 号。

えば，労働者階級が，社会的生産諸力の新たな発展水準に拠り，生産諸関係を自己に有利な方向へ意識的に発展させるためには，その社会のイデオロギー的社会諸関係，なによりもそのうちの政治的諸関係を自己に有利な方向へ変化させることによってこそ可能となる。政治的諸関係を中心としたイデオロギー的社会諸関係の分野こそ，直接そこで階級闘争がおこなわれる舞台をなしている。

国家権力の働きかけは，政治的諸関係の発展を通じ，さまざまな社会的諸関係の分野にたいしてなされる。国家は，イデオロギー的社会諸関係，なかでもその中心をなす政治的・法律的諸関係の結集点であり，担い手である。国家権力の働きかけによって，「第2次的，第3次的」な生産諸関係——たとえば財政諸関係はこれに含まれる——が，新たに追加的に形成されるという事実も，いわゆる「上部構造」の「土台」に対する能動的反作用の例である。たとえばブルジョア社会において，租税や国債等によってあらわされる財政諸関係はブルジョア国家の経済的基礎をなしているが，その財政諸関係自身は，政治的諸関係の一定の発展を通じたブルジョア国家権力の経済的諸関係に対する働きかけによって形成されるのである。

ところで，イデオロギー的社会諸関係の発展過程が，物質的社会諸関係の発展過程にたいして能動的に反作用するといっても，前者が窮極的には後者から条件づけられているのだから，もちろん，それは相対的にいえるにすぎない。しかし，イデオロギー的社会諸関係内部での複雑な対立的諸関係，相対的に独自な諸矛盾とその発展を認めることなしには，「上部構造」の能動的反作用を語ることもできないであろう。

資本主義から社会主義への過渡期には，まだ私的資本主義の経済形態が残存している。しかし，その資本主義的生産関係は，通常，社会主義国家の法や政治によって一定の規制をうける。たとえば，労働条件について法的規制をうける。このばあい，法は，放っておけばさらに一層搾取を増大させようとする資本家的自由意志に対する，社会主義国家の意志にもとずく制限を示す。ここには，法関係の経済関係にたいする反作用があるとともに，法関係の相対的独自性があらわれている。

イデオロギー的社会諸関係内部の諸矛盾が発展することを通じ，それらとむすびついた(このむすびつきも矛盾関係である)物質的社会諸関係内部の諸矛盾の発展にたいして能動的な反作用がおこなわれる。これが「上部構造」の「土台」に対する能動的反作用の基本的メカニズムである。

なお，そうした「反作用」は，たんに能動的であるばかりではない。一定の条件のもとでは，物質的社会諸関係の発展にとって，イデオロギー的社会諸関係の変化と「反作用」が，決定的となるばあいもある。政治や文化の状態が反動的で，経済の発展からすっかりおくれてしまい，経済のより以上の発展をいちじるしく阻害しているばあいがそうである。社会主義革命の過程は，その典型的なばあいの1つであろう。

5

以上のべてきたことから，「上部構造の能動的役割」にかんするスターリンの定式は，幾多の点で精確に正されねばならぬことがわかる。しかし，カムマリのようにするのは正当であろうか？　カムマリは，「経済的土台における矛盾と階級闘争を反映している敵対的社会の上部構造が矛盾をもっていること」を明らかにするため，「ブルジョア社会の上部構造」と「ブルジョア的上部構造」を区別するよう提言しているのである。

ここで，「経済的土台における階級闘争」などはありえぬということは繰返すまい。しかし，敵対的社会である資本主義社会の「上部構造」が矛盾をもっていることを明らかにするためならば，あえて「ブルジョア的上部構造」と「ブルジョア社会の上部構造」を区別する必要はないだろう。「ブルジョア的上部構造」は，全体としてはブルジョア的性格をもった，ブルジョア社会のイデオロギー的社会諸関係の1全体をさすものであり，それは当然，内部に対立的諸関係をふくむものだということがわかっておればすむことではないだろうか。カムマリは，つぎのようにも書いている。「資本主義社会で支配的なブルジョア的上部構造に対抗して，労働者階級は自分の政党や労働組合や文化的組織，自分の新聞，自分の社会主義的イ

デオロギーをつくりだす」「敵対的な社会の上部構造を理解するには，われわれは，その2つの敵対的部分を厳格に区別しなければならない。」

カムマリによれば，「ブルジョア社会の上部構造」には，「ブルジョア的上部構造」という「部分」と——かりに名づければ——「プロレタリア的上部構造」とでもいうべき「部分」が，2つの基本的「部分」をなしているようである。それなら「上部構造」がそれを反映する「土台」をみてみよう。たとえば，ブルジョア社会の生産諸関係は，基本的に，資本と労働力，ブルジョアジーとプロレタリアートとによってとりむすばれている。それはもちろん，全体としてブルジョア的性格をもっている。しかしここでもまた，ブルジョア社会の生産諸関係は，「ブルジョア的生産諸関係」という「部分」と，もう1つの「プロレタリア的生産諸関係」とでもいうべき「部分」に「厳格に区別しなければならない」のであろうか？

「ブルジョア的上部構造」は，基本的にはブルジョアジーとプロレタリアートの間にとりむすばれるイデオロギー的社会諸関係の総体をさすのであるが，それは当然にも，内部に敵対的矛盾をはらんでいるものとさるべきであろう。したがって，カムマリの主張する理由では，「ブルジョア社会の上部構造」と「ブルジョア的上部構造」を区別する必要はないといえよう。

また，スターリンはつぎのようにのべる。「上部構造は，生産と，人間の生産的活動と直接にむすびつけられてはいない。それは，間接的に，経済機構を通じてのみ，土台を通じてのみ生産とむすびつけられているにすぎない。だから，上部構造が生産諸力の発展水準におこった変化を反映するのは，すぐさまにでもなく，直接にでもない。土台における変化ののちに，つまり，生産におこった諸変化が土台にもたらした変化の屈折を通じてである。こうしたことは，上部構造の作用範囲がせまく，かぎられていることを意味している。これとは反対に，言語は，人間の生産的活動と直接にむすびつけられている。また，生産的活動とばかりでなく，生産から土台までの，土台から上部構造までの，人間の労働のあらゆる範囲における，あらゆるその他の人間の活動ともむすびつけられている。だから，言語は，土台における変化をまたずに，すぐさま，直接，生産におこった変化を反映するのである。だから，人間のあらゆる活動分野を包含する言語の作用範囲は，上部構造の作用範囲よりも，はるかにひろく多面的である。」

言語は，人間の生産的活動と「直接」にむすびついてはいない。「直接」にむすびついているのは，人間の思想とである。スターリン自身も，別のところではつぎのようにいう。「どんな思想が人間の頭に生じたにせよ，また，それらがいつ生じたにせよ，それらは，言語的材料を土台としてのみ，言語の語と句を土台としてのみ発生し存在することができる。……“言語は思想の直接的現実性である”(Marx)。思想の実在性は言語においてあらわれる。」言語は，人間の思想の「直接的現実性」であることにより，また，実践的，現実的意識(Marx)であることにより，人間の意識や思想が現実的に関係するかぎりで，他と関係する。言語には関係しないで，人間の意識や思想にだけ関係することも不可能であるが，人間の意識や思想には関係しないで，言語にだけ関係するということも，現実にはありえない。

あわせてここでは，つぎのことをはっきりさせておく必要があろう。すなわち，社会における物質的生産の一定の変化が，イデオロギー的社会諸関係にいかなる影響を与えるかということは，基本的には，その社会の物質的社会諸関係の如何によって決定されるということ，また同様にして，物質的社会諸関係の発展が，イデオロギー的社会諸関係の発展を規定するといっても，その影響は，イデオロギー的社会諸関係の内的仕組みを通じてなされるということである。

6

スターリンはつぎのようにのべている。「あらゆる土台は，自分に照応した特有の上部構造をもっている。……もし土台が変化し，なくなれば，その土台の後を追って，その上部構造も変化し，なくなり，もし新らしい土台が生れると，その土台の後を追って，それに照応した上部構造が生れ

る。」「上部構造は，一定の経済的土台が生きて作用する1時代の産物である。だから，上部構造が生きているのはながいことではなく，一定の土台が根絶し，消滅するとともに根絶し，消滅する。」

これにたいし，カムマリはいう。「“古い上部構造の根絶”の定式は，上部構造における変革過程，古い上部構造の新らしい上部構造による交替の過程にある複雑性と矛盾性のすべてを明らかにはしていない」「……“古い上部構造の根絶”の定式から，根本的な変化，土台における変化の後を追って，おそかれはやかれ(諸過程や歴史的諸条件の性質しだいで)おこなわれる上部構造での変革にかんするマルクス主義の古典的定式に，どうしてもたちかえらねばならない。」

たとえば社会主義諸国では，すでに資本主義の生産関係，階級関係がうちやぶられ，かっての政治的被支配階級であった労働者階級は政治的支配階級になっている。そして，かっての，労働者階級が政治的被支配階級であったような政治的関係，総じていえば，その政治的関係を中心としてふくむところの資本主義のイデオロギー的社会諸関係が，うちやぶられ，根絶され，社会主義のもとでは，労働者階級が政治的支配階級であるような社会主義のイデオロギー的社会諸関係が，つくりだされている。基本的にいえば，いわゆる古い「上部構造」は，社会主義のもとでは根絶されているのである。カムマリもつぎのようにのべている。「上にあげた定式(“上部構造の根絶”の定式)は，もしも上部構造を全体として，つまり生産諸関係の一定のタイプ(たとえば資本主義)に照応しており，これらの諸関係によって生みだされたイデオロギー的社会諸関係や思想や諸機関の限定された体系を念頭においているならば，正しい。」スターリンの「定式」が，その過程の「複雑性と矛盾性のすべてを明らかにはしていない」にしても，もし基本的な法則性をいいあらわしているならば，そのかぎりでは，なにもその「定式」をすてさる必要はないだろう。

ところで，スターリンは，「……もし土台が変化し，なくなれば，その土台の後を追って(то вслед за ним)その上部構造も変化し……」とのべている。カムマリによれば，「マルクス主義の古典的定式」も，「根本的な変化，土台における変革の後を追って(вслед за)」上部構造に変革がおこるとのべているかのようである。しかしMarxは，「経済的基礎の変化とともに(mit)巨大な全上部構造が……」と書いているのである。すくなくとも，革命期における「上部構造」の変革が，かならず「土台」の変革の後になるものだなどとは，けっしていわれてはいないのである。

カムマリはのべている。「“古い上部構造の根絶”の定式は，どんな思想と機関が上部構造にはいり，どんなものがはいらないのかということについてのスコラ的な論争を産んだ。若干の人々は，哲学や道徳や芸術を上部構造からのぞいておきながら，哲学的，道徳的，芸術的見解は上部構造にいれるという，ばかげたことにまでおちいった。」

すでに明らかにされた通り，ばかげた誤りは，結果的に何を「上部構造」にいれたか，いれなかったかにあるだけではない。スターリンの先の定式は，「上部構造」に何をいれるべきかというスコラ的でナンセンスな議論を生みだすのに多少とも関連があっただろう。しかし，その主な原因ではない。主な理論的原因は，特殊的にいえば，「上部構造に何を数えいれるべきか」という問自体の誤ったたてかたにあったのである。そしてその問が拠りどころにしていた，「土台とは……」とか「上部構造とは……」という，スターリンの『言語学の諸問題』の冒頭にあるような規定の仕方が，実は史的唯物論の基本思想に，根本から反していたのである。つまり，一般的にいえば，スターリン自身の「土台・上部構造」論についての理解が，根本において，誤った図式主義的なものであったということである。そして，その誤りを多少とも無批判にうけいれたうえで，一連の「土台・上部構造論論争」がおこなわれてきたからこそ，「上部構造に何を数えいれるべきか？」(さらに「下部構造としての国家？」等々)というふうな問をめぐって，スコラ的でナンセンスな文献解釈論議がひきだされてきたのではないかと思われる。

(本稿には大木啓次君の協力をえた)